

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雲と行く道
Author(s)	大關, 徳道
Citation	龍南, 247: 78-90
Issue date	1940-07-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/9215
Right	

雲と行く道

大 關 徳 道

そ の 一

多分元氣な事と思ふ。

偶然といふ事は有り得る事だが、それはやはり神の思召しによるものだね。昨日一生に一度の偶然を神は私に與へて下さつたのだ。さうしてその時が私の一生に再び來ない夢であつたと思ふ。

――汝よ、我が夢踏むからには靜かにも踏めといふ何かの言葉を思出すね、所が現實といふも餘りにも皮肉にすぎると思ふ。君は最後まで黙つてゐたね。別れの最後の瞬間まで君は最大の秘密を話し得なかつたのだね。それでも私には解りすぎる程解つてゐたのだ。愈々これで別れだといふ晩、君は私に歩かうと言つたね。私は嚴肅な氣持でその後から従つた。雨上りの輔道には眼に痛い程の灯が映つてゐた。その間を私は觀念したやうに、君の言葉を待つてゐた。けれども君はとうとう黙つて過した。家の前まで來た時君は黙つて手を差し出したね。恐しい告白を聞かなくなつた安堵と、私から言ひ得なかつた悔恨に胸をしめつけられながら、私も唯君の手を握り返した。これが二人の別れであると同時に、私の過去へもお別れであつたのだ。君もこの氣持を悲しまないでくれ。私が愛してゐたのは事實であつたとしても、私にはやはり世間の類推がいやでたまらなかつたのだ。二人は美しい氣持の積りでゐても、それがありふれた世間の感傷にすぎないと解つたら、どうだらう。きつと批判の眼が冷く過ぎるだらうよ。そんな戀を私は欲してはゐないのだ。いつ

も云つてゐるやうに私はまだ少年の夢を捨てきれないでゐる。

——日が照つてゐる。農家の縁側に少女がぢつとうつ向いてゐる。繪本を讀んでゐるのか。その子はやがて眠つてしまふ。「お馬がひん／＼鳴いてゐます。」少女はさつき迄澄んだ聲でさう讀んでゐた。その少女こそ私の妹なのだ。私の血を分けた妹がそれなのだ。遠い知らない何所かにその妹が居るのだ。あゝその顔さへ、私には言へるやうな氣がする。

そんな空想の世界をまだ私は追驅けてゐる。さうして私が戀する女にその少女の幻影を見るのだ。私が幸子を愛してゐるとする。しかしそれでさへ少女の幻影を愛してゐるのかも知れない。今更のやうに青い鳥を追驅けるチルチル・ミナルの話を思出すね。私にこの幻影が離れない間私は放浪するだらうよ。涙で罪を流してゆくやうな生き方をするに違ひない。勿論世の中に醜い事はいくらもある。けれどもそれを懸命に見まいとしてゐるのが私の以前の氣持なのだ。私はこの故に永久に愛を求める求道者であらうよ。

明日は試験といふに私の心は物狂しいほどに書きたいと思ふ。書いてこの夜を明してみたいものだ。それと云ふのも全て昨日の事件にある。

昨日晝過ぎ下宿で茶を飲みながらパスカルを讀んでゐた。私は彼の運命觀が前から好きであつた。その時電話がかゝつて來た。

誰だつたと思ふ。私を過去に於て苦しめ、君までも苦しめたあの女、幸子だつたんだ。受話機からびん／＼聲が響いて來る。私は夢ではないかと思つた。

「幸子です」

「原宿にゐます。會つて下さい。わたし決心したんですから」

私は發作的に受話機を切らうとした。けれども彼女の哀願の調子に打たれた。この東京に彼女は何故に來たのであらうか。決心といふ言葉も氣になつた。若し彼女が無斷で家を出て私に會ひに來たのなら、そんな無批判な彼女ではない筈だが、万一にもさうした事があつたら私としても考へねばならない。一番恐しい事は私が今尙彼女を愛してゐる事なのだ。憎めない女だつた。愛してゐた。君は赦してくれるだらう。私は君の氣持を後になつて知つたのだが、その時はもうどうにもできなかった。

私は中途で受話機を掛ける事を思ひ止つた。彼女の聲は慄へてゐた。

『幸子です。もうお目にかゝれないかもわかりませんから。』

『お話したい事がありますの』

『一人ですか』私は決心して始めて口を開いた。

「えゝ」

遂に會つてしまつた。愛してゐるが間に、白い智性の河を作つて別れた女ではあつたが、それは二人の罪ではなかつた。あまりにも複雑すぎる都會の子の心理が作つた罪であつた。私がつと馬鹿か利口かであつたら私は彼女を得たであらう。けれどもなまじつか理性を持つてゐたばかりに。私はよく精神の分裂を起した。進むべきか止るべきか。その矛盾に耐へられなかつた結果二人は愛しながら別れてしまつた。そしてその時は豫想しなかつた大きな智性の河を作つてしまつてゐたのだ。

新宿の人ごみの中で彼女はうつ向いてゐた。以前と變らない派手な着物を着て、裁きを受ける人のやうな淋しい顔をしてゐた。快活な幸子がこれ程までに淋しい顔をしてゐた事を私はまだ知らなかつた。二人は黙つて歩きだした。何か言ひたい。然し何を言へばいいのか。月並な感性や挨拶はこの二人の氣分を害ふだけだらう。元氣だつたかと問ひたか

つた。何故に來たかも氣になかつた。けれどもそれらの事を言ふ事は惜しい氣がした。途々私の用意してゐた彼女への皮肉も、餘りに嚴肅な彼女の瞳に會ふと脆くも崩れ落ちた。もしそれを言つたら彼女は泣きだしたかも知れなかつた。

それでも黙つてゐる事が一層彼女を悲しませた結果になつたのか、或はその時まで私の知る事のできなかつた他の事情からか、下宿に着くとすぐ彼女は泣いてしまつた。私は始めて泣いてゐる幸子の姿を見た。彼女は私に泣いて謝つた。然し今の私に何ができよう。私に涙はでなかつた。もし彼女の間に泣く涙なら、もうとつくに渴き盡されてゐた筈だつた。思へば混亂した日が續いた。けれど今は女々しさを捨てたのだと、感情に溺れてはいけないと思つた。

宵暗が迫つた頃彼女はもう落着いてゐた。白い顔を夜目に浮かせながら彼女はこんな事を話した。明日は遠いホノル、へ夫と共に旅立つといふ。豫見してゐた運命ではあつたが、私はその時斷崖に立つてゐたのだ。「今なれば何とかなれる」幸子も、私もその言葉を口にこそ出さなかつたが、暗黙の裡に意識しようと努めた。けれども私は其所でも思止つた。幸子が幸福になり私が幸福になる事は、さうする事であらうか。凡そ現實的な問題を考へる時私は斷崖の前で立止まざるを得なかつた。私には何にもできなかつたのだ。意氣地ないと言つてくれるな。自分の意氣地なさを自覺してゐるだけに、さう言はれるとつらかつた。喜んで彼女を抱けないのが悲しかつた。結婚した體ぢやないか。そんなのがあるもんかと黙つて目を瞑つてゐたら、彼女の消えいるやうな聲が聞える。結婚前の身體だつたらねと。

唯然し、私は今なほ幸子の心を確かと握つてゐた事を知つて嬉しかつた。私に過去を忘れようとして、二人で一生再び逢へないだらう最後の飯を喰つた。

「最後の夜だね」

私がさう言つた時彼女は長い睫毛を伏せて

「私がいけなかつたのですわ。憎まないで下さいね」

許すといふ一語を言はないまでも、その氣持を私の顔で讀みとつた彼女は安堵したやうに小さな息を吐いた。

「お互に過去の事は言ふまい。せめて最後の夜を楽しく過さうよ」

ともすれば瓦解しさうな氣持を抑へてさう言つたが、私にも過去を忘れる事はできてゐなかつた。愛してゐながら別れるといふ事に耐へられない氣がした。

「夫の人を愛せるかね？」

ぎよつとしたやうに彼女の顔が引締つて、以前よりもつと頭を垂れた。かりに夫を愛してゐるとしても彼女には言へないだらう。愛してゐないと言つても、それは安價な慰みの言葉としか聞えないだらう。而もこんな事を言つてしまつた自分の感情の狭さを恥ぢたく思つた。彼女には大きな皮肉として聞えただらう。頼りない東京に一人來てくれた彼女の氣持を考へたら、そんな事が言へるだらうか。

「外に出ようよ」

私が立上つた後も彼女は放心したやうに坐つたまゝであつた。私がもう一度繰り返さうとした時、はつと彼女は私の顔を見つめた。

「怒つちやいけないよ。唯私はあなたの身體を心配しただけなんだから」

彼女が深い悔恨の慥愁に沈んでゐた間に、私はその時言葉を言つてゐるといふ意識を失つてしまつた。言葉はもう意志を媒介する方便を超へて、感情の塊りとなつて流れでるのだ。お前が悪かつたのでもない。私が悪かつたのでもない。私達は餘りに良心的過ぎたのだ。お互の幸福を餘りに考へすぎたのだ。——瞬間の沈黙の中で二つの大きな流れが絡みあつた。私達はもう言葉を知らなかつた。私は眞直に彼女の瞳孔がぐつと擴がるのを見た。彼女は瞳の奥で泣いて

わたのか。

長い瞬間が過ぎた。

「外に出ようよ」

これ以上彼女を苦しめてはならないと思つた。逃げてはならない。水晶のやうにはつきりした自身像を描いてみやう。何所に立つてゐるのか。逃げる事が弱い男の常であるならば。自分はそんな男であつたのか。水晶に映る赤と黒との像がほんとうの自分であらう。解けきれないまゝに私は激しい決心をしさうだつた。英雄的な動機が私の心を支配した。——けれどもその恐しい瞬間も理性によつて覺まされようとした時彼女は立上つてゐた。

「行きませうか。聞いて頂きたいのですけど、歩きながら話した方が話しいゝかも知れません」

餘りに淋しすぎる爲か聯想を許さない程美しく見えた。崩壊の危機が過ぎたのだと思つた。私達は外に出た。武藏野を渡つて来る風が強く吹いて来る。きびしい寒氣が凍つたやうに夜を釘付けにしてゐる。やがて氣付いたのだが月もその夜は照つてゐた。「あの頃は星がよく墜ちましたわね」と彼女は言つた。

あれも少年の夢であつたのかと、一葉のたけくらべに出てくる信如といふ可憐な少年を思ひ起した。永久に去るといふ日、花一輪に幼い夢の殘滓を託してやつたあの美しい心根も、やつぱし戀であつたのか。あれが戀か。

幻想に耽つてゐる間に寒さで兩脚ががく／＼してきた。女の草履の音が魔物のやうに二重に聞えて来る。それが後髪引かせるやうな氣持で私の感情を引き戻すのだつた。その頃になると私の意識はある方向を形作つてゐた。彼女を無事に送りとゞける事が私の人間としての務めだと思つた。これ以上私達がどうもがいてみてもどうにもならない。大氣がその嚴然とした掟を、凍てついた道の横から囁くやうに、プラタナスの木が荒涼として動く。月光に浮び出た白い幹が墓場に行く人間の道を象徴してゐる。白々として目の前に擴つて消えて行くこの道は一体何所まで續いてゐるのか。な

る事なら意識の明燈を閉したまゝ地球の果まで歩いて行きたい。そのまゝ、蹣跚として歩き倒れるのだ。

「このまゝ死んだらいいだらう」

もう一つの心がピエロの役を演じてゐる自分の感傷をよび覺して、唯自分は死なないだけだと、彼女の方を振り返つて見た。死ぬ事を論議してゐる間は贅澤な遊戲に耽つてゐるのも同じだ。死ぬより他に方法がなかつたら、人は案外落着いて死ぬるかも知からない。その土壇場の氣持を知らうとする事は、まだ現實に餘裕があるからなのだ。彼女はシヨールに顔を埋めてゐたが、額が聰明な理智と美しい調和を保つてゐた。死が萬事の終極を意味するならば、美しい完成も全て死によつて消滅し、荒蕪とした宇宙の何所かにさまよひ出る。そして世の全てが終るのだ。彼女の存在も靈魂も灰色のヴェールに消されてしまうのか。さすれば全てが終るのか。

淋しい氣がする。二人の天國を夢みる事が現實的に出来ないのは、宗教的な氣持を持つ事のできない悲しい自分の性からくる。俗に汚れた鋭い智性の故である。あゝ始めから何にも知らずにをればよかつた。文字も女も知らずにをればよかつたと思ふ。然し考へてみればそれでいいのだ。人間として苦惱の數々を味ひ盡す生き方は、假令それが涙であらうとも、淋しくあらうとも、人間として生きる最良の手段でなければならない。弱いとは云へない。美しい生き方だからである。

彼女は殆ど聞きとれない位の聲で淀みなく話し續けた。恐らく私に會ふ以前に幾度も心の中に繰り返してゐた言葉であつたに違ひなかつた。

「最後に會ひたいといふ氣持よりも、あなたに會つて解つて貰ひたかつたのです。」

私が否定しようとする氣持を彼女は抑へるやうに言つた。

愛情といふことが良心に作用する事を私は始めて知りました。愛情がある爲に良心が許さないので。私は苦しんで

ぬます。自分から求めたことですのに、今になつて苦しい氣がするのです。どうしていゝのかわからないのです」

「會はず顔がないと思ひました。けれどもこの苦しみを解つて貰いたいといふ氣持の方が強かつたのです。私は決心して來たのです。女としてどんなにこの決心がつらいものか、あなたはには解らないでせう」

私は黙つてゐた。今更どうにもならない中垣を目前に見るやうな氣持で、安價な慰めの言葉や辯解を言ふ氣にはならなかつた。このまゝ別れるといふ事が以前から作られてゐた道である事を、私は確かなものであると思つた。女の氣持が解らない事はなかつた。然しそれは現實の武器とはならないのだ。何時の間にか私達は人通りの多い通りを歩いてゐた。彼女の沈んだ聲音が急に抑揚を高めてきた。

「別れると言つたでせう。私はあの日泣いてしまひましたのよ。女つてあゝなると弱いものね。一日中泣いた後でもう一生崖戀はしまいと盟つたのですよ。それが……」

彼女は突然記憶を失念したやうに黙つてしまふと、激しい決心の色が頬のあたりを硬直させてゐた。

「よしませうかこんな話。」

私も亦できるだけ優しく彼女の誤解を解いて置きたかつた。

「今夜ね、喜んでいゝのか悲しんでいゝのかわからないんだ。然しお互に真心のあつた事は嬉しいと思ふよ。私は黙つてゐたのは決して思つてゐるからぢやない。過去の事に餘り觸れたくないのだ。何か思つてゐると、すぐ心が疼くん
だ」

「さうね」

彼女は賢そうな瞳を伏せて

「女の愚痴だつたのかしら。私は愚痴を言ふやうな女だつたのかしら」

口の中でつぶやくやうに言つてしまふと、淋しげな觀念さでもう黙つたまゝだつた。永久に交る事のない平行な軌道を歩かねばならない運命を、彼女もはつきり知つたのであらう。星明りに見る彼女の顔が、印象的に私の網膜に焼きついて離れなかつた。彫刻を見るやうな線の鋭い輪廓を見たのだ。

もう街の灯は見えなかつた。白く埃の積つた植込の木の葉から、都會の汚れた空氣を知つて、私達は心までも冷くなつた。噴水の水は凝固として動かなかつた。池の水が黒々と深い沈淪に沈んでゐた。夜目に見る水の色は不可思議な神秘境へとひきづり込む。どうしよう。然しその内心の動搖に比べて空氣は靜穩だつた。二人はもう一語も話さなくなつてゐた。沈黙が私達の心を和やかに溶けこませた。地の底にめ入り込んで行くやうな錯覺に陥りながら五體の感覺を失つた私は、肉体の存在も忘れて茫莫とした境地に遊んだ。私達は立上つた。黒い柙棺の手を脱れるやうに二人は立つてゐた。「最後だね」私がさう言つた時彼女は遂に泣いてしまつた。悲しい世の中だ。それはわかつてゐる。然し私は男なのだ。女々しい感情に走つてはいけないのだ。——私は強く思つた。幸子は涙を拭ふ事もせず涙が自然に乾くまで泣いてゐた。危く瓦解しさうな心を抑へて私も心の中で泣いてゐた。

横濱に行く終列車にやうやく私達は間に合つた。ものも言はず激しい心で私達は乗り込んだ。いよく最後の時が來たのだ。彼女は夫の許へ歸る。私は途中まで送つて行く。火花のやうに散るのは追憶と歎喜と悲戀の激しい鬭争であつた。禦しきれない心に乗せたまゝ汽車は動きだした。窓ガラスに寫つた二人の顔が揺れる。泣く奴があるか、馬鹿、と自分で自分を叱つてみたが遂に涙がこぼれてしまつた。窓ガラスを透した遠くの闇の中で明滅する光が涙で曇つて見える。明滅する街の灯。あれはもう意識の奥に消えた筈だ。それでもまだ私の網膜を射るのは悲しい未練だよ。

私は目を瞑つた。今朝からの事件を回想してみようとしたが、凄じい時の尖光が私思念を混亂させてしまふ。黒い影がさつとよぎる。紫紺の火がばつと燃え上る。頭がくら／＼としてきた。私は再び目を開けた。彼女はガラス越しに

ぢつと遠くの方を眺めてゐた。

品川驛で下りたが私はあの時の印象がまだ忘れきれない。それは月光に白々と光つてゐた二筋の線路だつた。それは鋭い刃物を見るやうな光で、私の血に飢えてゐた。もしあの齒車の下に私の身体を横へたら氣持よく私の身体は切れたであらう。そしてどす黒い血をあの鐵路は吸ひ盡しただらう。さうなら幸子。車は去つてしまつたのだ。私はまた此所に生きてゐる。さうなら。永久に。

運命、運命、何といふ壯重な響きを持つた言葉なのか。私は悄然として歸つて來た。机の前に坐つた。數時間前迄彼女が居た部屋にはもう誰の影もなかつた。全身の緊張が一時に弛んで來た。私は今更のやうに空しい部屋の中を眺め渡して、今さきまでゐた彼女の幻影を求めようとするのだつた。彼女の姿がちらついて離れない。翌日に控えた試験などはどうでもよかつた。あゝこの歎喜の青春の夢を私は永久に忘れはしないのだ。私は心の貴さを知つたのだ。

——思出は何時の場合も美しい

これが彼女の最後の手記であつた。パスカルのパンセに誌された彼女の文字こそ、私の記念としていつまでもあるだらう。

87
今朝はちら／＼雪が降つてゐる。案外落着いた氣持でこれを書いてゐる。さうして愈々本當の氣持を書く時が來たやうな氣がする。「二人の幸福の爲に」と何時か君はかう言つてくれたが私はさうは思はない。脚光を浴びて踊り狂つて來たのが私だ。そしてみんなの前でピエロの役を演じて來たのが私だ。全てを彼岸のものとしてしまつた現在、私は過去を恥ぢたくなる。幸子の事も言へない事だつたが、君にだけは眞實を知つて貰ひたかつた。恐らく君も亦私が何を言ひ、何を言ひたいのかわかつてくれるだらう。もし君が僕を憎んでゐてくれたとしたら、却つていいのだが、君への義

利を考へる時俺は苦しい。俺が何故にあやふやな氣持で、眞當は好きでいながら別れてしまつたのか、それは自分の悲劇的な性質がさうさせたのだ。悲しい道化の役だ。脚光を浴びて踊り狂ふ。それでも樂屋裏では心を裂かれる思ひがする。悔ぬが湧く。白雲のやうな悔ぬが湧く。何故俺は、と限らない過去への悔ぬが湧く。君が想像してゐたやうに二人の感情は決して同じものではなかつた。寧ろ私等は反對の性格を持つてゐた。その故か私達は些細な事の誤解から氣つかない大きな溝を作つてしまつた。さうと氣付いた時、自分は怒つた。がその怒りが覺めた時鋭い自己反省に苦しめられた。結局自分には彼女を愛してゆくだけの人格がなかつたのかも知れぬ。さうして、その時君の彼女に對する氣持を知つた時、自分は危く死を思つた。二人の男が一人の女に戀するなんて餘りにも皮肉なのだ。無論自分では美しい氣持だと思つてゐた所で、世間の眼は何と見る。君は僕に幸福なれとは言つた。けれど自分は一体幸福だつたらうか。もし假りに戀であつたら、假令それが瞬間であつても幸福かも知れぬ。然し自分の場合悲しい事に戀ではなかつた。自分は君への義理を知つて居た。それが口實にすぎなくとも、私達は餘りにかけ離れた心を持つてゐた。

然し現實の女を言ふ事は止めやう。私は今でも彼女を批難する氣になれない。彼女を批難する前に自分に對する意氣地なさの悔ぬばかりでどうにもならない。彼女が文字通り永久に去つた今日も、俺はさびしい涙を流す。樂屋裏で傷心するあの道化役者の涙に似た涙を流す。自分は女を憎んでいゝのか。喜んでいゝのかわからない。憎い氣もする。東京なんかに来てくれなければよかつたとも思ふ。然し喜ばねばならぬのかもわからない。彼女は恐らく手紙も書くまい。俺も書く氣はしない。もしこれが又何時か會へる二人であつたら私は恐らく君にも云へないだらうが、今はさうではな
い。

兵營のほの暗い灯の下で恐らく君はこの手紙を読むであらう。そしてきつと、僕と君との過去の友情の膜を切り落してくるだらう。絶体の境地に立つた現在、二人は以前の輝かしい友となれる。二人は以前のやうに無邪氣な氣持で接

せられるのだ。君は毎日猛訓練を受けてゐるとの事

「此所では憊む暇のない事が唯一の慰みだ」

と言つてゐる君の氣持がひし／＼と胸にこたへてくる。と同時に立ち上らねばならない自分を感じる。安閑として傷心の涙に耽つて來た自分を思ひ直す。

「戦友は皆俺より偉い」

と君は言ふ。實際人は自分より皆偉い。自分ではこれではいけないのだ。新しく立上る事によつてのみ救はれるのだ。おそらく今から暫くは苦しい日が續くと思ふ。忘れようと努力する苦悶に苦しめられるに違ひない。しかし一番いゝ事は、どんなに苦しんでも憊んでも、一旦過ぎた過去は歸つて來ない事である。俺の空想も現實も過去のものとせざるを得ないだの。憎む事も憊む事も愚かである。

雪が降つてゐる。俺はあの眞只中に行つて何時までも立盡してみたい。無感覺な頬の上に冷い雪の結晶が重り合ひ、やがて俺の血脈が凍つてくるればいゝ。冷い風が過ぎてゆく。木枯の野から野へと、冷えきつた心に音をたてる。歩行を失つた俺は灰色の視野に擴つた墨雲の流れを見上げる。運命の光は何所から流れて來るのか。宿命の手は何故自分を抑へるのか。喜びもない悲しみもないあの世界へ行きたい。神樂の音、その時はきつとあの音がするに違ひない。自分は幼い時その夢を見た事がある。赤い火が燃えてゐた。ゆら／＼と立上る焰の影からその音が送られてくる。それも瞬時である。やがて一切の光が消え盡す。後には薄黒い道が待つてゐる。其所は生きなくとも住める世界なのだ。

生きてゐるのは自分なのだ。私は生きる爲に苦悶しなければならぬ。そんな事はどうでもいゝとして、私はもう全てを言ひ盡したやうだ。たゞ彼女に對する氣持を除いては、思ふ通りに書けたやうだ。どうしても書けないのは、彼女に對する未練の氣持だけだ。男としてどうしても言へない氣持だ。おそらく君も一切の事が明白になつた事と思ふ。人

間は悲しい時に泣き、嬉しい時には笑ふものだが、悲しい時にも笑ひ、嬉しい時にも泣かねばならないことがあるものだ。悲しいと言つても現實には通じない。自分は今女の氣持に思ひ當る。寧ろ世の中では自分の氣持を自由に表す事は許されてゐない。一旦口に出された眞理は、もう眞理ではなくなる。二人一緒に話してゐる時に自分はよくこの事を感じた。言葉といふものが何の役にもたゝないばかりか、却つて虚構を作つてしまう。口に出された眞理は嘘だ。と自分は確く思ふ。

かう言つた時女が悲しさに言つた。

「では今言つてゐる事も嘘なの」

私は苦しい立場に追込まれた。餘りにかけ離れた心だ。

女はいやだ。それでいて未練も言ひたい。何もかもわからない人生だ。君は男の世界に住んでゐる。俺はあの外人部隊を思ひ起す。全ての執着を切り落して死に行く魂の葬列を思ひ起す。自分が取るべき道も亦これより以外にはない。現實的に幸福を掴む事のできない悲しい性の持主には、過去への執着を切り落すよ仕方がない。

死の豫感がする。雪はもう止んでしまつた。清らかな雪の色だ。君の頼もしい顔が急になつかしく浮び上る。船はもう岸を離れてゐる頃だ。それを思ふと考へを纏める事ができない。では又、さようなら